

ひとりあるき



夜の世界が壊れはじめている

夜がつくった常識というものが壊れはじめている

辺りが明るくなって

見えなかったものが見えはじめているのだ

けれど人の本体は別の場所にあるので

夜の暗闇が壊れ すべてが見えはじめても

けっして慌てる必要はない

たとえ自分のほんとの姿が

ハトだったとしても・・・だ





あたまの上の
真上の空を見上げてみた

久しぶりに背筋がのびた

空の光を深呼吸して
からだいっぱい届けてみる

くらくらとめまいがしそうだ

ぼくの遺伝子の幾つかは
間違いなく 空を求めている

空を見上げていると
何かがこころのドアをたたき始める
思い出せない記憶がざわめき始める

でも・・・
いくらドアをたたいても
いくらざわめいても
遺伝子のドアを開ける鍵が見当たらない

はがゆい思いで
ぼくはまた空を見上げる

そして いつかすべてがわかる

その時を信じて
もう一度 空の光を深呼吸する

ぼくのころには
ずいぶん長い間閉まったままの窓がある
その窓にはおかしい鍵がついていて
開け方がよくわからない

自分で閉めたのか最初から閉まっていたのか
それさえもよくわからない

鍵穴はついているが その鍵が見当たらない

あっちの引き出しこっちの戸棚
引っくり返し掻きまわし
探したけれど見つからない

気がつくところには傷だらけになって
それでも見つからなくて ほとんど疲れてしまう

風を入れて 光を入れて
外の空気と同じ温度になったら こんなに孤独じゃないのに
とにかく鍵が見当たらない

探し疲れた日差しの中で
ぐったりと横になってまどろんでいると
頭の上から声がした



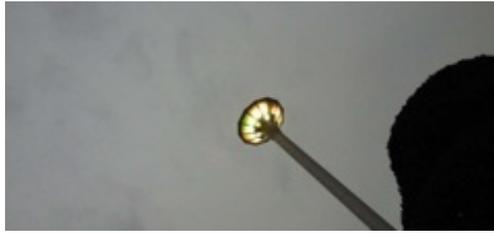
「かあさん 変なのが転がってるよ」
「ああ そりゃ 『かぎ』」っていう
やっかいな生き物よ」



海は
島を抱きしめてる夢を見ていた

島は
海に甘えてる夢を見ていた

そして 星は
この夜が永遠につづく
夢を見ていた



この話しは夜の話し 夜のような闇 闇だと思い込んでいる光の話だ
ぼくが夜明け間近の街を歩いていると いきなり頭の上から声が降ってきた

「やがて夜が明ける」

どうやら街灯のようだ

「やがて夜が明ける そしてもうすぐ眠る」

ため息のような声を降らせると 街灯はまたじっと地面を見つめた
そういえば遠くで朝日の低い歌声が地鳴りのように辺りを振るわせている
空はふうふうと深い呼吸をくり返し 色を取り戻し始める

ぼくは街灯の声の下からじっとその空を見上げた

街灯はさらに囁くように声を降らせる

「わたしは闇とともに生きる光だ 闇が消えればわたしも眠る」

もう一度 街灯に視線を戻す

「太陽はわたしを眠らせ あらたな闇を生む その闇をいっそう深くするのが・・・わたしだ」

彼がしだいに冷たくなってゆくのがわかった

ぼくはそれでも 街灯が降らせる次の言葉をしばらく待っていた

待っていたが それを最後に彼は眠りについた

気がつくと街はすっかり色と形を取り戻し また新しい物語を作り始めようとしている

ぼくは冷たくなった街灯をそこに残し 街に溢れる太陽の歌声の中に歩いていった

「わたしの中で温まりなさい」

太陽の声は低くやさしい

大きなガラスの壁に反射して街中に木魂してゆく

光の声の中で満たされてゆく自分がわかる

満たされたぼくの傍らには 暖かくなった闇が笑っていた



罪とは積のこと
積み重ねる歴史のこと

重い次元のこの世界では
積み重ねること知るべきものがある

人は罪を背負わない
罪では道を造れない

人は積を重ねる
積を重ねて道を造る

どこかで罪と積を間違えて
人のところはさらに重くなった

罪とは積のこと
積み重ねる歴史のこと

むかし 知恵を得た人間は自らが神になろうとして
神と自分との間にメスを入れた

ところが 意識だけは切り離れたが心はどうにもならなかった

いづれ意識が心を動かせばいいと そのまま放っておいたが
実はその時 心に小さな傷を作っていた

心は その傷を癒すために いつしか甘い蜜を求め始めた

しかし甘い蜜は傷を癒すどころか傷口をさらに広げ
広がった傷口のために蜜の量はさらに増え
やがて心をすっかり呑み込んでしまった

とうとう 心は蜜の底に沈み その姿がよく見えなくなった
この 心を呑み込んだ甘い蜜を欲望と言う

神（真）の愛の満ちるところに欲望は存在しない
ゆえに甘い蜜は神（真）の愛ではなく
枯渇から心を守る防衛手段だった

甘い蜜の海から心を引き上げ
どれほどの人々の心が息を吹き返せるだろう

神（真）の愛は 太古より変わりなく
ここに降り注いでいるというのに

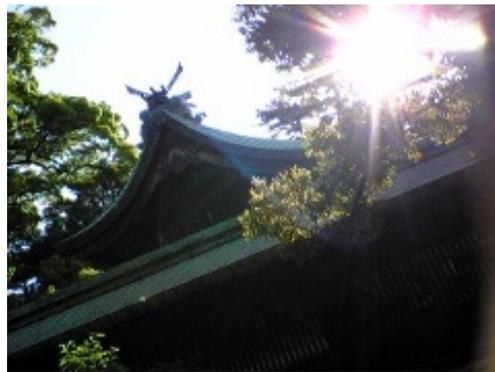


「いま」 . . .とは
過去と未来が会う場所
プラスでもなくマイナスでもなく
常に「零（レイ）」であるべき場所

「いま」 . . .とは
過去と未来が別れる場所
過去を切り取れば 過去とともに欠け落ち
未来を切り取れば 未来とともに欠け落ちる

「いま」 . . .とは
過去と未来が生まれる場所
とめどない時間は ココで生きているものたちの
「いま」という刹那から溢れ出す

「いま」 . . .とは
目には見えない
見えないけれど 確かにココにあるエネルギー



波紋

遠いむかし、ある国に年老いた王様と若くて美しいお妃様がしあわせに暮らしていました。

ある時、王様はお妃様に言いました。

「お前とわしの年の差を長さに変えるなら いったいどれ程の距離になるのだろうか」

するとお妃様は答えました。

「きっとそれは 永遠に近いほど遥かな道のりになるでしょう」

王様は悲しくうなずいて、お妃様の肩を抱き寄せました。

「なるほど 永遠か・・・いくら王の力をもってしても 時の壁を越えることは 出来まい」

お妃様は答えました。

「王様 時の壁は神様の創られた壁 神様の創られた壁は越えるものではなく 理解すべき壁だと思います」

王様はおおきくうなずいて、お妃様をみつめました。

「理解するには何が必要であろうか」

お妃様は続けて答えました。

「それは少しの勇気とおおらかな愛だと思います」



それから幾年か過ぎたある日のことです。王様はその時、死の床にありました。

「いのちとは何故生まれてくるのであろう どうせ こうして死んでゆくのに」

王様は目を閉じたまま吐息のように言いました。

王様の手をずっと握り締めていたお妃様は、生気を無くした王様の横顔を見つめながら言いました。

「きっと人と人が出会うために いのちは生まれてこなければならなかったのでしょうか 王様とわたくしも出会うことが必要だったので

水の波紋のように 出会いは出会いを導いて・・・わたしたちの生み出した波紋も きっとこの世界には必要だったので」

お妃様がそう言い終えると、ほどなく王様の手から力が無くなるのを感じました。

王様がお妃様の言葉を聴くことができたのかどうかはわかりません。ただお妃様には王様が少し微笑んだように見えたのでした。

それからどれほどの歳月が流れたのかは誰もわかりません。ただ、ふたりの残した波紋は今も何処かで・・・続いているということです。



精神は宇宙へ

魂は神へ

肉体は地球へ

意識は未来へ

心はわたしへ

言葉はあなたへ

・・・たどりつく



わたしの声は

嘆くためにではなく

歌うためにある

わたしの声は

叫ぶためにではなく

祈るためにある

どこまでも いつまでも

こえとどけ こえとどけ



孤独のカルマと出会うために
孤独を呼び出す場所に行く

時間を越えて交わした 氷の約束
勇気よりも冷たい 約束の場所

思い出せない過去の 遠い顔
孤独を愛し そして悲しんだ顔

抱きしめて 抱きしめて
氷になってもかまわない

今度こそ 逃げないで
嘘に 振り向かないで

孤独のカルマと出会うために
孤独を呼び出す場所に行く



止まらないでください

たとえ わたしが

まだ 追いつけなくても

止まらないでください

あなたの 背中が

わたしの 元気になるから



わたしが生まれたのは、地球人が金星と呼ぶ星である。

金星での命の誕生は、地球のように雌雄の結合から生まれるのではなく素粒子が引き起こす原子転換から生まれる。原子転換を理解しようとしめない地球人には、こういう宇宙の神秘がわからないだろう。

宇宙空間を漂う素粒子の思念エネルギーは、わたしのような・・・生まれた当初は、こういう姿ではなかったが・・・生物をも生み出すのだ。

ただし、金星での思い出はほとんどない。なぜなら素粒子から生まれたわたし達は、最初半重力物質のため金星の遠心力により宇宙空間へ放り出されてしまうのだ。

それでたまたま・・・そう、たまたまである。

この地球のそばを漂っているときに、とある地球人の身体から放たれる電磁波に引き寄せられてしまった。つまり地球人が私を・・・呼んだのだ。

地球人の放つ電磁波は、かれらの感情によって微妙に変化する。その変化の具合によって、実はわたしたちの地球上での姿が決まるのだ。

わたしのような姿のものを地球上では「ねこ」と呼ぶらしい。

・・・ねこ？

実におかしな呼び名だ。

おまけにわたしを呼び寄せた地球人は、わたしのことを「みい」と名づけた。わざわざ呼び寄せておきながら・・・「みい」である。

たった一文字と半分である。

情けない・・・。

わたしが金星からこの地球上に現れるまでに、いったいどれほどの複雑な神の計らいがあったと思うのだ。それを、たった一文字と半分。だいいち・・・だいいちわたしは、オトコなのだ！！

考えれば考えるほどせつなく・・・だからわたしは、地球人がいくら呼んでも返事をしないことにしている。知らん顔をしてやるのだ。そしてこうして、高いところからいつも睨み返してやる。思い知ったか地球人め。

怖れおののいたのなら さっさにご飯の用意をしろ!! 金星人は腹ぺこなのだ。



人と居てさみし

ひとり居てまたさみし

さみしき飯を食い

さみしき時を味わい

やがて

さみしさの自由を知る



いつも 何かから開放されたいと感じている

それは 満足感や達成感がほしいというのではない

かといって 自由になりたいというのでもない

閉じ込められていないことは知っている

もう少し奥の方からやってくる

どちらかというと

「旅」への郷愁に近い・・・キモチ



学びというのは
知らなかったことが
わかってくることじゃない
忘れていたことを
思い出すこと
いくら本を読んでも
いくら人の話を聞いても
たったひとつの自覚にはかなわない



美しいものが好きだ

心地よい場所が好きだ

清々しい景色が好きだ

そして・・・静かな

あなたの言葉が好きだ

これらの言葉たちが
誰かの意識のカギを開けて
その中に閉じ込められている
インスピレーションを助け出し
そして みんなで街に繰り出して
パレードなんかしてくれたら・・・
ぼくはしあわせ

